

## 「カンボジアの瞳」

青森県 清涼寺住職 柿崎宏隆<sup>こうりゅう</sup>老師

大本山總持寺をお開きになられた<sup>けいざんぜんじ</sup>瑩山禪師様。お亡くなりになる少し前に「法堂上見挿鋏人」「はっとうじょうに、くわをさしはさむひとをみる」とおっしゃられました。御自身が亡くなった後も、本堂で鋏をふるう人が見える、つまり、仏さまと人が共に生きる希望にあふれた姿が見えると。

瑩山禪師様はご自身の死を前にして、自分のことではなく、後の人の幸せである姿を願われ、またその景色が見えたわけです。これは瑩山禪師様のそれまでの日常底が、そうであったからでありましょう。

さて、数年前、日頃お世話になっている和尚様に誘われ、カンボジアを訪れました。

その和尚様は托鉢をしてお金を集め、その集めたお金でカンボジアに小学校を建てられました。その完成披露式典と、その小学校を現地の方にお渡しする譲渡式があるということで、同行させていただきました。

国際線の飛行機にのって約七時間。カンボジアの首都プノンペンに降り立ち、そこで国内線の飛行機に乗り換え一時間のフライト。そこからさらに車で四時間の移動でした。

強い日差しが降り注ぐその小学校の校庭には、数百人の子どもとその親、近隣の村から沢山の人が集まり、盛大な歓迎をして下さいました。式典で和尚様がスピーチに立たれました。そこで「夢を見る」というお話をされました。

この新しい小学校で子ども達がしっかりと勉強してくれる姿を夢見ます。将来自分が亡くなった後も、それが繰り返されていく姿を夢見ます。そしてここで学び育った子供たちが、カンボジアを豊かな国にしていく姿を夢見ます。そういった内容のお話をされました。

夢とおっしゃっておられましたが、和尚様の眩しように細めた瞳には、それがもうはっきり見えているに違いないと、横で聞いていて感じました。

その爽やかなお姿に、私も誰かの幸せを願いながら今ここを生きる、そんな夢を見、行動できる人になりたい、そう感じた青空の下でした。